

(われ、ただ今から突入する！)

と、南西諸島、沖繩本島の西方海岸洋上で、九州基地離陸発進、三時間半後、あとにも先にもただ一回だけの無線電波を基地に発信し九七式重爆八機とともに沖繩の北(読谷)および中(嘉手納)飛行場へ、海上の艦船や陸上よりする敵の猛烈な対空砲火を、ものともせず、操縦桿をシツかと握りしめて突ッ込んで行き、着陸後は航空兵科にもかかわらず、一般戦闘兵科と同様に敵に決戦を挑み、敵をエグリ返し、その航空基地を大混乱に陥し入れ、悠久の大義に殉じた巻脚絆の男、これこそ諏訪部忠一大尉、その人である。

昨今、マスコミによつてこの義烈空挺隊の挺進部隊である奥山大尉ほか八十七名については、いろいろとPRもされているので、ここではその重複を避け、その飛行隊である諏訪部第三独立飛行隊の活躍についてスポットをあててみましょう。

——義烈空挺隊を搭載し、巻脚絆のいで立ちで操縦して、沖繩の北飛行場に胴体強行着陸を執行し、部下操縦士らとともに奮戦し玉砕した男。部下二十三名と一緒に晴れの感状授与の栄を受け、その武勇義烈、万世に燦たり

奥本 実 陸士54

## 義烈飛行隊長 諏訪部忠一中佐を憶う

昭和二十年五月二十四日、午後十時十一分。

「ただ今、到着！」

卒業後は重爆隊として各地に転戦し、昭和十九年秋ごろより第三独立飛行隊長として勤務、一時はサイパン爆撃に参加するなどして、先の義烈空挺隊と不二一体となり、サイパンに強行着陸

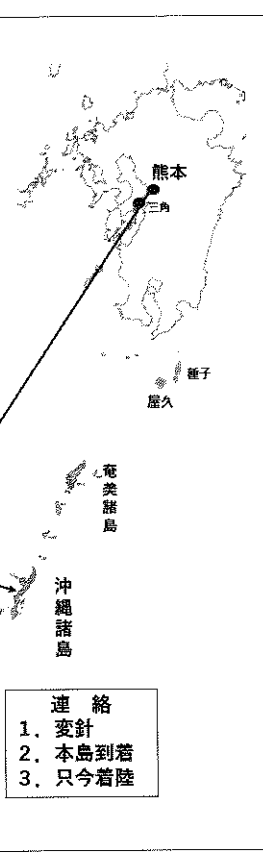
この義烈空挺隊については、その戦果の一端についても、果のほども明らかでないまま幾年月か

終ちましたが、その戦果の一端について敵米軍の公表を拾ってみましょう。防衛庁戦史室（西浦進氏、34期）提供の米海兵隊戦史『沖繩、太平洋の勝利』P 362、363の一文を借用すれば、

の破壊火薬をもつて非常な損害をわが方（米軍）に与えたが、ついに彼らは飛行場防備の海兵の手で殺された。飛行機（米軍の）八機が、火炎と爆発のため破壊され、二十四機が損傷を受けた。二名の海兵が飛行場の小銃火にあつて戦死し、十八名が負傷した。八人か十人の日本兵によつて行われたこの損害から判断すれば、さらに一機または二機の敵（日本）の輸送機が着陸したと仮定すればその破壊は驚くべきものがあつたであらう。……」

り飛來したチャールズ・J・ムーア少将の輸送機を含む）が破壊した。またその他に二十九機（F4U二十二機、F6F三機、B24二機、輸送機二機）が損傷を受けた。なお七万ガロンのガソリンが燃えた。

この物凄い捨駒によつて生ずる混乱は、ほとんど想像ができない。小銃、機関銃火が入り乱れて、飛行場およびその近郊において射撃されるのは、多分米軍の損害の多かつた理由であらう。



本日（昭20.5.24）	
07:30	起床
12:00	昼食
13:00	睡眠
~15:00	
17:00	撤出開始
17:10	移動開始
18:10	搭乗
18:40	離陸
18:55	三角変針
21:10	突入
22:00	

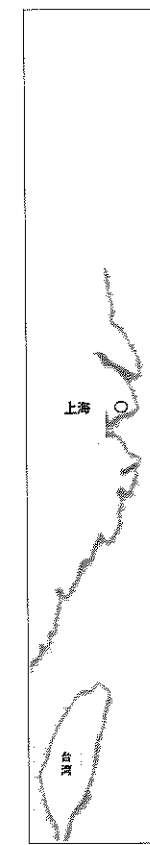
- 絡 到着  
針 島に  
変 本島  
本 今  
只
- 1.
  - 2.
  - 3.

「第五番目の飛行機は、指揮塔より約二五〇フィート・北東より南西に伸びた滑走路に車輪を下ろさずに着陸した。推定十二名の日本兵は無事着陸し、少数の勇敢なものが如何なる程度のことをなし得るかを実際に示した。着陸とほとんど同時に、破壊火薬で飛行場に置いてあつた飛行機の炎上が始まつた。

最後に残った日本兵一名は、五月二十五日午後零時五十五分、道路から藪に駆け込もうとすると、第三大隊本部の後方、四分の一マイルのところで射殺された。

合計六十九名の日本人の死体が数えられ、海軍設営隊の手で埋葬し、一名も捕虜となつたものはなく、ある者は自殺した。全体において日本軍は、義烈攻撃を成功と見なすことができた。

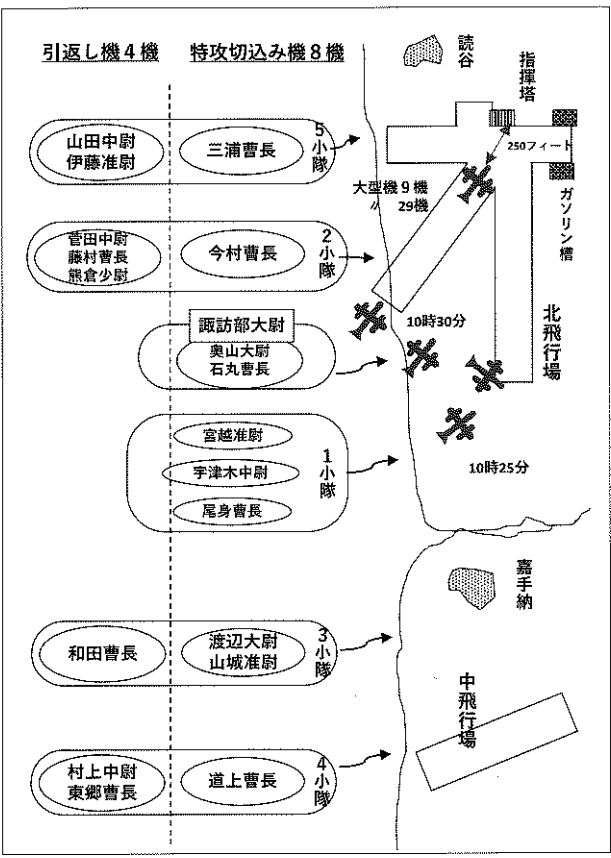
これが第二次世界大戦、太平洋戦争末期の昭和二十年五月二十四日に決行された義烈空挺隊奮戦の実況であつて、当時、敵であつた米軍の戦史にのつている偽らざる真つ正直な敵側による義烈空挺隊の戦果に対する評価であり



ます。

古今東西を問わず、戦場心理として如何に冷静に念じつつも、敵に与えた損害を大にし、わが損害を過少に評価しがちな通弊を当然と見なすことを許されるならば、客観的にみてこの義烈隊の敵側の評価は、あくまで最小限度のものであって、実際においては、それ以上の損害の多かつたことも、また当然のことでありましょう。さらには、この戦史の文中に、「これは普通の神風機でなく、中部太平洋において始めて行われた義烈攻撃であった」と

米軍が述べています。必死の日本軍が新らしく不意に使い出した——この特殊戦法に対して、米軍の受けた精神的脅威もまた大きなものがあつたことも事実でありましょう。そして、「さらに一機または二機の敵輸送機が着陸したと仮定すれば、その破壊は驚くべきものがあつたであろう」と敵将をして述べ懐せしめたるあたりは、その空挺隊、飛行隊ともに一人々々の壮烈な奮戦玉砕ぶりが偲ばれるのであります。当時、目標地に到着できた機数は、



予定数の十二機が八機に減つたことは事実であります。当時彼我態勢の懸隔や、そのころの特攻隊の命中率より比較するに、この義烈行の到達率は、むしろ奇蹟的な成功といわねばなりません。これを思うとき諏訪部飛行隊の苦心もまた一人だつたことでしよう。私自身も経験した事でありましたが、空挺隊はまた「空の神兵」と誉えられたものであります。神兵は神兵であつても、その空中挺進途中においては、なにかくしましよ、組上の鯉であり、メーファーズ(没法子)であるのが實際であります。従つて、この間にあつても、飛行隊の航法、機関、敵に遭つたときの回避など、いろいろと苦心のほどが倍加されて、誘導をなし得られるのが事実であります。

思えば連合軍に対して本土決戦を絶叫した当時、サイパンの陥落、沖縄の玉砕と相次ぐ悲報に加えて、矢つぎ早にそのサイパン、沖縄飛行場より飛び立つた敵のグラマン、B 29の日本本土攻撃がなんと、その足の早かつたことか。そして戦勢は一変して、軍隊はおろか国民の上に、戦闘という姿が直接に降りかかつてしまつたのであります。自らの力に頼らなければならぬの戦闘が本土一億国民一人々々の心の底に深く刻みこまれ、あの何十条もある飛行雲の交錯する大空をながめて長嘆息し、歯ぎしりしたことだらうか。そして敵の機銃掃射と巨大な銀翼のB(はかやろう) 29(につくい野郎)に、地団駄を踏んだことでしょうか。そして一人々々の国民が、これら敵機の飛び立つ不沈航空母艦である沖縄、サイパン敵飛行場の恨めしさが骨身にこたえたことでしょうか? 時移り、星変わり、時代は世を挙げて「ノー・モア! 特攻!」と叫ばれるようになりましたが、これら特攻隊や、国民の一人々々の心に直接触れていた沖縄飛行場覆滅の特攻義烈空挺隊らの英霊を慰め、その遺績顕彰に努めなければ、「ノー・モア! 特攻!」も空虚な空念仏に終わるのではないだろうか? 義烈空挺隊、奥山隊一三二名【第一挺進団、挺進第一聯隊、第四中隊(工兵中隊、中隊長奥山大尉・53期)】を空中輸送し、沖縄北および中飛行場に、空挺隊員も九七式重爆操縦者も、命の綱と頼む落下傘を投げ捨て、身体には持てる限りの爆薬、兵器弾薬を装着して胴体強行着陸を敢行し、着陸後は操縦者も間一髪、空挺特攻斬込み隊員に早変わりして、敵飛行場にある大小さまざまな敵飛行機や、飛行場設備を手あたりはつたりと破壊し、ガソリンを

炎上させて、その航空能力をエグリ返そうとする第三独立飛行隊三六名は、

諏訪部忠一大尉(54期)指揮の下に、別図空挺計画のように昭和二十年五月

二十四日午後六時四十分、十二機編隊で、九州、熊本健軍飛行場を離陸進発し、三角を経、夜暗を利用して接敵、

沖繩本島西方海上二五〇軒の地点に迫り、そこで東方に向つて変針した。途中四機は機関の故障や、夜間航法の誤りなどで、基地に引き返したが、残り

八機は沖繩本島の西方より、その中の二機は嘉手納の中飛行場へ、主力の六機は空挺隊長の奥山大尉をのせた機を

諏訪部大尉が自ら操縦して、読谷の北飛行場へ接近していったのであります。そして五月二十四日午後十時十一分、

「ただ今、到着！」と、基地に送信して突入、殴り込みして全員玉砕いたしましたのであります。

この斬り込み戦闘を行った空挺隊八八名、飛行隊二四名の阿修羅の如き獅子奮迅の働きは前記米軍戦史の物語りで明瞭であります。敵側も改めて

確認するように、一人の生存者もなかったという点において、この義士行について、否、一億国民の悲願に直結した義烈行について、深くわれわれを

して感歎せしめるのであります。今にして思えば、この壮途にあたって基地を出発する際の、あの異様な服

装、航空長靴でなく歩兵と同様の足もと、

「操縦者と巻脚絆」この姿、この服装も、「宜なるかな」と、その決意のほどを偲はせるのに十分なものがあります。

市ヶ谷の陸軍予科士官学校で同区隊にあった吉岡克治君(54期、12中2区、神戸市住)が、

「かれ諏訪部君は非常に運動神経の発達していた男で、航空科には最適任だった。天晴れなその最後が、その在校時代の面影からして、手にとるように偲はれる」と賞歎し、またその第一

挺進団長であった中村勇氏(36期)をして、

「諏訪部君は、義烈空挺隊と不二一体となり、敵中に強行着陸しそして出来たらその分捕りのB29で米本土に報復爆撃を企図しようとする特攻飛行隊

は厳選の結果、諏訪部忠一大尉を隊長とする第三独立飛行隊と決定された。この飛行隊の特色は、その半数に近い幹部が、陸軍航空士官学校の56期、57期、を主とした、花なれば若桜の青年

将校によつて編成されていたことである。豪快、大度量の奥山、誠実、篤厚な諏訪部の好配合は、全く当を得ていて、ついに有終の美を結んだ主因である」とベタ賞めに賞賛されている。

昭和三十六年八月十五日、当時の第

六航空軍司令官、菅原道大氏(21期、元航空総監)は和歌山県、高野山の空挺墓に遠路老軀をおして親しく詣でて空挺十七回忌のその追悼の辞に、

「奥山、諏訪部の両君！兄らと、あるいは修武台の一隅に、あるいは基地宿舎の一室に国軍の将来を談し、または悠久の大義に生くるの途を論じあったことが、いまなお昨日の感がありま

す。隊員統率の苦衷も十分拝察いたしておりました。

故に全隊員が不惜身命、安心立命の境地に立ら、莞爾として機上の人となつた姿の崇高さには、思わず頭の下がるのを禁じ得ませんでした。同時に、さすがは選ばれた日本男児なればこそと、いいしれない満足感の湧きいでましたことも、また実感でありました。

義烈空挺隊の首途を見送り、また見送られる熊本健軍飛行場の光景は、強く心に刻みこまれて瞬時も忘れたことはありません。生ある限り永く、否、幽界で皆さんとお会いするまで、私の胸にシツかと抱きしめられるであります。

皆さんの強行着陸は敵の心胆を奪い、周章狼狽の極地に追い込み、多大の戦果を得たのであります。戦勢を挽回するに到らしめなかつたことは、

けだし、一般状勢の然らしめるところ、いかんともなしがたい運命でありました」と、かつては日本陸軍落下傘部隊の劈頭作戦で大きな戦果を収めたパレンバンと、その掉尾の義烈空挺作戦を担当された——この老將軍の心中に去来する明、暗の感懷や、いかばかりであったらう。哀悼切々として一字一句を、遺族や参列者が熱い感激にむせんたものでした。

諏訪部君の英霊よ、この親鸞が、子鷲を思うの真情に、以て瞑すべしである。空挺部隊と航空部隊とは切り離して語ることができない。埼玉、北野の航空神社奉賛会で空に散つた英霊を祭つて下さつておられる筑紫二郎氏(40期)も、空挺隊に多大のご配慮をいたしておられます。

そして、英霊の一笑破顔を偲びつつ、かしわ手うてはごたまするなり、比ぶべき勝る白なし真白(しんぱく)に、高野にかおる傘兵の花

と、空、挺、一致の心を寄せていただいています。私もつたないながら詩に托して、

噫、義烈飛行隊、敵領沖繩読谷浜、血枯民尽神呻、豪、諏訪部今攻入、電裡残、紅只一信

電裡残、紅只一信

この三文を、故諏訪部忠一中佐の霊に、謹んで捧げます。

機密連合艦隊告示(布)第一二六号  
布告 義烈空挺隊

奥山道郎ほか八七名(個別名列記)

【お願いと、お礼】

本稿については、諏訪部忠一君を語るについていろいろ脱漏や、さらに有意義な資料もあることと思ひますので、あえて読者各位の補備を、お願いいたします。

第三独立飛行隊  
諏訪部忠一ほか二三名(個別名列記)  
概ね右同文で全軍に布告している。

奥本 実

なお資料をおよせ下さいました防衛

54期(歩)挺進・奈良県出身

庁戦史室米軍戦史、中村勇氏筆「空の神兵讚、義烈空挺隊賛」に厚く御礼申し上げます。

大東亜戦争の劈頭におけるパレンバンの挺進奇襲において感状を受け、また天皇陛下に単独拝謁の栄に浴す。

感 状

終戦時は歩兵第一九七聯隊大隊長

第六航空軍

義烈空挺隊

第二独立飛行隊

右ハ昭和二十年五月二十四日夜、決死  
沖繩北中飛行場強行着陸ヲ敢行シ所在  
敵機ナラビニ敵兵ヲ強襲シ、克ク二十  
数時間ワタリ敵飛行場ヲ制圧シ、翌  
二十五日午前、我ガ特攻隊ノ沖繩周辺  
敵艦船ニ対スル大挙攻撃ヲセシメ赫々  
タル大戦果ヲ収メタリ。之全ク右挺進  
攻撃隊犠牲献身ノ精華ニシテ、忠烈燦  
トシテ万世ニ輝キ、真ニ皇軍ノ龜鑑タ  
リ。

仍テ茲ニ感状ヲ授与ス

昭和二十年五月二十六日

海軍総司令官 豊 田 副 武